





(問題は次のページから始まる)

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

動物の言葉と人間の言葉の境界を画定するという問題には、どこかとてもいかがわしいところがある。「動物には言語はあるのか、あるならば、それと人間の言語は本質的に同じなのか、それとも違うのか」——この問いは、まだ何が問われているのかよく分からぬ問いではない。いったい、何をもって、「言葉をもつ」とか「言語」と称すればよいのか。何をもって、「本質的に同じ」とみなせばよいというのか。

( a )、問いの意味を明らかにするために答えるという、一見<sup>⑦</sup>トウサクしたやり方もある。問いは、あらかじめその意味を明確にされた上で問われるとはかぎらない。おずおずと顔色をうかがいながら差し出された答えを前に、問いはその意味するところをゆつくりと顕<sup>あ</sup>わにし、やがて問いがその問うている意味を明らかにしえたときには、むしろ答えは用済みのものとして価値を失う。ここで私が問おうとしている問いは、実はそんな問いのひとつにほかならない。

「動物に言葉はあるか」と問われたとき、ひとつの答えは、「もちろん言葉をもつ動物はいる」というものだろう。有名なミツバチの8の字ダンスやイトヨのジグザグダンスを挙げる人もいるだろうし、鳥の多様な鳴声について語る人もいるだろう。これらは、( 甲 ) という観点から言うならば、明らかにコミュニケーションである。そして、コミュニケーションの成立とすることで言語の成立を認めるならば、これらの動物たちは言葉をもっているということになる。

これに対して、人間の言語だけに備わっていると思われる固有の<sup>⑧</sup>トクシツが、さまざまな観点から挙げられもするだろう。ある人たちは、人間がもっている無限の構文能力に注目する。われわれ人間は、いくつもの文を教わり、そこから語を切り出して、さらにこれらの語を組み合わせて無数の新たな文を作っていく。そしてまた、そうして作られた新しい文を理解することができる。だが動物はそうではない。動物はたんに定型化した反応を示すにすぎない、と。またある人たちは「シグナル」に対する「シンボル」としての言語の働きを述べ立てようとするかもしれない。動物の言葉は状況に促された信号にすぎない。だが人間は状況を概念によって捉え、むしろ状況をこちらの側から構造化していくのだ、と。

だが、こうした答えを前にして、私にはひとつの野蛮な疑問が生じる。もし、無限の構文能力を示さないようなきわめて単純な言葉

しか用いない人たちの共同体があったとしたらどうか。彼らは「人間の言葉」を話さないのだろうか。《1》たとえば、鳥の鳴声と同程度の言葉しか話さない人たちがいたとしたら。彼らの発話は信号にすぎないのか、それともシンボルなのか。

用いられる言語の在り方だけに注目するならば、この共同体は「人間の言語」をもってはおらず、むしろ「鳥の言語」のごときものをもっているともみなされるだろう。だが、ここで私は、まったく逆の答えの可能性を探ってみたい。彼らもまた、単純ではあるが、なお人間の言語を用いている。そう答えてみたいのである。しかし、このように言うと、ただちにこう問い返されるだろう。——では、鳥たちはどうなるのか。鳥たちもまた人間の言語に類するものを話しているということになるのか。——いや、そうではない。鳥たちは「動物の言語」を用い、想定された共同体の人たちは「人間の言語」を用いている。そう言いたい。(b)、差別したいのである。だが、これは馬鹿げているようにしか聞こえないだろう。なぜって、この共同体が鳥と同程度の言語を用いていると仮定したのは、ほかならぬ私なのだから。

お湯が沸くと「ピー」という音を立てるうるさいヤカンがある。その音を聞いて、私は火を止めに行く。そのとき、私はヤカンとコミュニケーションを行ったのだろうか。「ピー」という音を聞いて、立ち上がりながら私が、思わず「はい」とか声を上げてしまったのは、あれはヤカンと私の会話だったのだろうか。まさか。では、お湯が沸くと「ピー」と鳴くようにインコを訓練してみよう。そのインコが「ピー」と鳴いたので私は火を止めに行く。これならば、私とインコのコミュニケーションと言えるだろうか。そう言える気もしないではない。それでは、一人の子どもをヤカンの番人として育てたとしよう。その子が「ピー」と言う。私は火を止めに行く。さて、いったいこれらは三つとも「言語」という観点のもとで同じ身分とみなされるべきなのだろうか。私はそうではないと思う。《2》三つとも異なったレベルの事例である(あるいは、異なったレベルでありうる)と思うのである。

「ピー」という言葉の使われ方だけを見ているならば、これらは(少なくともインコと子どもの場合は)同じものと言ってもよいだろう。お湯が沸き、「ピー」と言い、それを聞いた者が火を止めに来る。それですべて。何の違いもない。だが、「言語」という概念を明らかにするには、たんにそれがいかに用いられているかを見るだけでは足りないのである。なるほど、「言語」と呼べそうなものをその機能によって分類し、単純な機能と複雑な機能との間に線を引き、そしてここから上は「人間の言語」であるとして分類する、そのような試みにもそれなりの意義はあるだろう。だが、いま私が興味をもっているのはそういうことではない。「言語」とはけっして、

たんにあるタイプの機能をもった活動の<sup>(7)</sup>ソウシヨウではない。

より正確に問いを立て直そう。ここで問われているのは、「ピュシスとノモス」というギリシャ哲学以来の古くさい問題にはかならない。ピュシス——自然——と、ノモス——人為、制度、慣習、規範——との概念的対立が、動物の言葉と人間の言葉との対立において見てとられるべきなのだ。「自然」と「規範」とは異なる二つの概念であり、なんらかの量の<sup>(8)</sup>タカを同列に比較しようとするものではない。それゆえ、たんに機能の複雑さに注目して両者を区別しようとするのは筋違いでしかない。きわめて単純な規範的秩序というものもあり、それはあるいは高度に複雑な自然的秩序よりも複雑さという点では見劣りがするかもしれない。だからこそ、「ピー」という音を発するという、それ自体はこれ以上ないくらい単純な事例で両者の違いを考えてみたいのである。孤立して取り出された事例そのものには、何の差異も見出せないかもしれない。《3》ピュシスの秩序とノモスの秩序——両者はどう違うのか。

チンパンジーに人間の言葉を教えるという研究がある。手話を教えたり、カードを用いたり、あるいはキーボードを操作させたりもする。そして、いまやチンパンジーたちの中には教えられていない新しい文を作る能力をもって人間とコミュニケーションを行うものもあると聞く。だが、こうした実験がたんにより複雑な機能をもった活動の達成をめざすものであるかぎり、私にはさほどの興味はない。冷たい言い方をすれば、サーカスで熊がどのくらい複雑な芸を覚えられるのかという程度の興味しかない。

<sup>A</sup>重要なことは、動物に人間の言葉を教えるとき、彼らをピュシス的存在とみなすかノモス的存在とみなすか、という点にある。そして、チンパンジーの言語習得が複雑な<sup>(9)</sup>オペラント条件付けの結果であるならば、すなわち、アメとムチによって強化された行動というものであるならば、X、それは自然の秩序<sup>(10)</sup>に属している。われわれは<sup>(11)</sup>イゼンとして、そのチンパンジーを自然

的存在とみなしているのであって、言語規範を共有する共同体の仲間とみなしてはいないのである。

ここで私は、「どのように言語が用いられているか」という視点ではなく、「どのように言語が教えられるか」という視点からことごとくを見なおしてみることを提案したい。なるほど、「ピー」という音がして聞いた人が火を止めに行くという事態は、ヤカンでもインコでも子どもでも、いずれの場合でも同じである。だが、ヤカンやインコや子どもをそのように仕向けるには、それぞれ異なったやり方が為されるのではないだろうか。われわれはここで、その教え方の違いに注目しなければならぬ。《4》

( c )、考えていこう。インコの場合と子どもの場合とは、「ピー」という言語を習得する仕方はどのように違ったものとなり

うるのか。

インコにこの言語を教えるには、お湯が沸くという刺激に対して「ピー」という鳴声で反応するように条件付ければよいだろう。そしてこの場合には、お湯が沸いたという刺激に対してインコは否も応もなく「ピー」と鳴声をあげるようになる。それはもう訓練のたまもので、自然にそう反応してしまうのである。しかし、子どもの場合には違う。そう言いたい。子どもはお湯が沸いたという状況を認知し、この状況では「ピー」と報告すべきなのだと考え、そして「ピー」と口に出す。だから、それはたんなる条件付けではない、と。——<sup>B</sup>だが、本当にそうだろうか？

子どもに「ピー」という言語活動を学ばせようとしたら、われわれはどうするだろうか。ここで、いささか不自然な想定だが、その子どもは他のいつさいの言葉を学んでいないとしよう。子どもは、「ピー」という言葉の意味を、他の言葉を介してではなく、ひたすら現実に向き合うことによつて学ばねばならない。そうすると、おそらくこうなるだろう。——われわれはまずやってみせる。お湯が沸く、「ピー」と言う。それを、子どもがまねするまで続ける。そしてついに子どもがそれをまねしたならば誉める。《5》それを繰り返せば、子どもは適切に「ピー」と言うようになる。——いや、だめだ、これじゃあアメとムチの条件付けそのものではないか。しかし、ほかにどうしようがあるだろう。言葉によつて言葉の意味を教えることはどこかで終わる。そしてその地点では、子どもは初めての言葉の意味を、他の言葉によつてではなく、状況の中でつかみ取っていくしかない。そのとき、こうした原初的な場面では、けつきよくのところわれわれのやれることは（乙）と同じレベルでしかないのである。

\*本文は、出典の記述を一部修正している。

（出典 野矢茂樹『他者の声 実在の声』より）

（注）オペラント条件付け—自発的な行動に対して強化刺激を与えてその行動の生起確率を増加させること。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 、(イ) 、(ウ) 、(エ) 、(オ)

- |     |        |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|-----|--------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| (ア) | トウ サク  | ① | 当 | ② | 投 | ③ | 盗 | ④ | 倒 | ⑤ | 踏 |
| (イ) | トク シツ  | ① | 質 | ② | 失 | ③ | 執 | ④ | 室 | ⑤ | 疾 |
| (ウ) | ソウ シヨウ | ① | 操 | ② | 相 | ③ | 総 | ④ | 装 | ⑤ | 想 |
| (エ) | タ カ    | ① | 太 | ② | 他 | ③ | 田 | ④ | 多 | ⑤ | 汰 |
| (オ) | イ ゼン   | ① | 意 | ② | 委 | ③ | 以 | ④ | 依 | ⑤ | 囲 |

問二 本文中の( a )～( c )に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は( a ) 、( b ) 、( c )

- ① いわば      ② では      ③ そして      ④ なぜなら      ⑤ だが



問三 空欄（甲）、（乙）を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は（甲）

9、（乙）

10

（甲）

- ① 以心伝心
- ② 情報伝達
- ③ 言語活動
- ④ 構文能力
- ⑤ 情報収集

（乙）

- ① 情報の伝達
- ② 情報の収集
- ③ 不自然な想定
- ④ 言語の習得
- ⑤ 動物の調教

問四 空欄 X に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 11

- ① 同じ共同体に属する仲間とみなしていても
- ② 訓練ということが重視される場合であっても
- ③ その成果が複雑な活動である場合には
- ④ その成果が単純な活動である限り
- ⑤ その成果がどれほど複雑な活動であっても

問五 次の一文は、本文中の《1》～《5》のどこに入れるのが適当か。次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 12

だが、両者が位置づけられる秩序が異なっているはずなのだ。

- ① 《1》      ② 《2》      ③ 《3》      ④ 《4》      ⑤ 《5》

問六 傍線部A「重要なことは、動物に人間の言葉を教えるとき、彼らをピュシスの存在とみなすかノモスの存在とみなすか、という点にある」とあるが、これによって筆者はどのようなことを言おうとしているのか、最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 13

- ① 動物を訓練して人間の言語を習得させる場合には、動物をピュシスの存在と考えた方がうまく教えられるということ。  
② 動物を訓練して人間の言語を習得させる場合には、動物をノモスの存在と考えた方がうまく教えられるということ。  
③ ピュシスの存在である動物にノモスの存在である人間の言語を教えることはできないということ。  
④ ピュシスの存在である動物とノモスの存在である人間という区別は人間の側からの勝手な決めつけにすぎないということ。  
⑤ 動物を自然的存在と考えるか規範的存在と考えるかによって動物の活動の捉え方も変わるということ。

問七 傍線部B「だが、本当にそうだろうか」という疑問に対する答えの説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 14

- ① 子どもはピュシスの存在なので、動物のようなアメとムチの条件付けによってしか言語を習得できない。
- ② 子どもはピュシスの存在なので、動物のようなアメとムチの条件付けこそが重視されるべきである。
- ③ 原初的な場面では子供に言語を教えることもアメとムチの条件付けと変わらない。
- ④ 原初的な場面と複雑な場面という区別自体が事柄の本性を無視した人間の側からの区別に過ぎない。
- ⑤ 動物の言語と人間の言語という区別は、もともとは古代ギリシャにおけるピュシスとノモスの問題に帰着する。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 15

- ① 曖昧な問いはその問いの意味することが明らかになってしまえばその答えは用済みになってしまいうので、答える価値がない。
- ② 人間の言語のみに備わる無限の構文能力という働きに、シンボルとシグナルとの区別は帰着する。
- ③ チンパンジーに人間の言語を教えるという研究は、サーカスで熊に芸を教える程度の価値しかない。
- ④ 自然と規範という二つの概念の区別を、機能の複雑さに注目して行おうとするのは見当はずれに過ぎない。
- ⑤ インコの場合と違って子どもの場合には、「ピー」という単純な言語を習得させる際、不自然な想定をせざるを得なくなる。

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

生まれたばかりの子どもに道徳的な基準はありません。だんだんに成長していくにつれて、道徳的な行動が身についていくことは疑いようがありません。では、子どもはどのようにして道徳的行動を発達させていくのでしょうか？

道徳的行動が選択されるためには、いま自分が置かれている状況が道徳的葛藤状況であるということを理解せねばなりませんし、<sup>A</sup>「二つの対立する「快」の感情のうち、一方を抑制して道徳的基準を達成することの「快」の方を選択しなければなりません。したがって、道徳的行動の成立には、これら二つの行動の間には対立があるということを理解していなければなりません。欲望に対して自己抑制が働かねばならないでしょう。そこで、これらの感情がどのように発達していくのかを検討することが、道徳的行動の発達要因になります。

ところが、私は、実はこの問題についてよく知っているわけではありません。児童心理学や発達心理学の分野では、子どもの道徳性がどのように発達するかに関する研究がたくさんおこなわれているに違いありません。しかし、私は詳しくないので、その方面で明らかにされたことを知りたいと思われる読者の方々は、そのような「ブンケン」を探して読んでください。

それでも、発達の問題について、私が述べておきたいことがいくつかあります。それは、「心の理論」と、共感と自己抑制の発達についてです。

道徳は、他者の利益と自分の利益の葛藤から起こることなので、道徳的に行動することができるとは、一つには、他者というものがいて、その人も自分と同じように考えたり感じたりする存在であるということを理解できることが必要でしょう。このことは、人間であれば当たり前のように思われるかもしれませんが、生物学的に考えるにあたっては、非常に重要なことです。(a)、他者の心の理解ということは、人間以外の動物には、あまりその証拠がないからです。それには「心の理論」という脳の働きがかかっています。

「心の理論」とは、心についての科学的な理論のことではありません。そうではなくて、人間が誰でも持っている、他人の心の状態を類推する脳の機能のことを「心の理論」と呼ぶのです。

- a このように、人が他者の表情や言葉などを手がかりにしてその人の心の状態を推測する機能を「心の理論」と言うのです。
- b 笑い顔の人を見れば、その人は楽しいと感じているのだと類推しますし、泣いている人がいれば、その人は悲しいと感じているのだと類推します。
- c 私たちは、日常的に他者の心の状態を無意識のうちに類推しながら暮らしています。
- d また、「ねえ、はさみ持ってる？」と訊きかれると、その人は、ただ単にあなたがはさみを持っているかどうかという事実に興味があるのではなく、その人自身がはさみが欲しいのだな、とその人の要求や目的を類推します。

なぜ「理論」なのかと言うと、

X

、他人が何を考えているのか、何を感じているのかは、しよせんは推測にすぎないからです。しかし、私たちは、他者の心の状態について、ただやみくもにあてずっぽうの推測をしていて、表情や言葉などが何を意味しているのかを理解し、ある「理論」をもって、他者の欲求や目的や心の状態を推測しているでしょう。その全体の働きが、「心の理論」なのです。他者理解のために「心の理論」がたいへん重要であることは、よくわかりのことと思います。これがうまく働いているからこそ、人は、自分とは異なる他人の状態を推測し、その人が何を欲しているのかを理解することができるのです。《1》

「心の理論」が、子どものときにどのように発達していくのかについては、いくつもの研究があります。乳幼児は、自分自身の感覚と知覚、そして自分自身の感情状態を参照しながら、他者の視線の方向、他者の顔面表情などから、他者にも欲求があること、達成したいと欲する目的があることを知り、他者の心は、その視線や表情から類推できるということを徐々に理解していきます。四、五歳になれば、自分の欲求と他者の欲求とが異なる場合があることや、他者の思っていることが、現実とは異なる場合もあることなど、いろいろな社会的状況が理解できるようになります。だからこそ、さまざまな登場人物の心の葛藤の描写が含まれた「お話」「物語」を楽しむことができるのです。《2》

この「心の理論」という脳の働きは、人間の脳に備わったものであって、視線の方向の<sup>(1)</sup>タンチ、顔面表情の読み取りなど、それぞれ

れに特殊化した神経細胞もあります。そして、赤ん坊のころから四、五歳ぐらいまでの間に、順を追って発達していくようです。

していいことは何か、いけないことは何かを、いちいち条件づけのようにして罰と<sup>(9)</sup>ホウシヨウで教え込むこともできるでしょう。しかし、人間の子どもには、他者にも心がある、他者にも欲求がある、ということを理解する基盤があるのですから、他の動物に比べて道徳的な行動が教えやすくなっているのではないかと思います。

次に、自己と他者の欲求の間で葛藤を起こしたとき、道徳の教えるところに従って、自己抑制を働かせねばなりません。では、自己抑制というものはどのように発達してくるのでしょうか？感情は、おもに大脳辺縁系という部分で生成されます。何かが欲しい、何かが嫌だという感情は、そこで起きます。それに対する自己抑制は、脳の前頭葉から大脳辺縁系に対して信号が送られていくことによつて成立します。

<sup>B</sup>前頭葉から辺縁系に向けての神経ニューロンの発達は、乳幼児のときから徐々に発達していきますが、思春期になってもまだ全部は完成しないこともあることが知られているので、かなり時間がかかるものようです。たしかに、ティーンエイジャーでも、まだ完全に自己抑制することはなかなか難しいようですね。

それでは、自己の欲求を満たすことの「快」と、道徳的指示に従って自己抑制したときの「快」とで、後者の「快」の方を選択する感情は、どのようにして発達するのでしょうか？自己の欲望が満たされたときの「快」は、個人的な「快」ですが、道徳的な判断に従ったときの「快」は、親をはじめとするおとな、他人からの称賛に起因するものです。(b)、親をはじめとする他のおとなからの称賛を得るといふ社会的な「快」が、非常に大きいものと感じられなければ、そして、社会的な称賛を得られなかったときの「不快」が非常に大きいものと感じられなければ、そちらを選択するようにはならないでしょう。《3》

道徳的行動が選択されるためには、「罪の意識」「恥」といったネガティブな感情が大事なのではないかと私は思っています。これはたいへん強力な感情なので、個人的な欲望の達成を抑えるのに十分な働きをしているからです。では、罪の意識とは何でしょうか？これは、基本的には、Yでしょう。また、恥とは、自分はこうあるべきであるという一種の理想像に比べて、実際の自分がそうではないという思い、そして、そのような実際の自分が、自分にとって大切と思う人々から称賛されないという思いでしょう。道徳的行動を支える感情として、この二つのネガティブな感情は、たいへん大きな役割を果たしていると思えます。

それらの感情はどのように発達していくのでしょうか。罪の意識を感じるには、自分のふるまいによって傷つけられた相手の痛みが、自分の痛みとして感じられなければなりません。ここには、当然ながら「心の理論」の発達も含まれていますが、「心の理論」だけではまだ思いやり、共感の感情には行き着きません。他者の心の状態を理解し、他者の欲するものを理解するだけでなく、自分がその他者の立場になったときのことを想像して、他者の喜びを自分の喜びとし、他者の痛みを自分の痛みとすることができなければなりません。《4》

人間は、たしかにそのような共感を得ることができません。それは、どういうメカニズムによってなのでしょう？ 他者理解は、自分を参照しておこなうので、他者の状態を理解するには、自分が同じような状態にあったときのことを思い起こすことになります。そのとき、それらのエピソードに伴って自分自身が感じた感情もいっしょに思い起こされ、他者と自分が重なるのでしょうか。《5》

ところが、共感の感情、思いやりの感情がどのように発達してくるのかについては、あまり研究がありません。一歳未満の赤ん坊が、他の赤ん坊が泣いているのを見ると自分も泣きだしてしまうことがあるのは、よく知られています。これは、なぜなのでしょう？ これは共感そのものではありませんが、共感の感情の発達と関係があるのでしょうか？ 共感の発達に関しては研究があまりないので、よくわかりません。

自分があるべき自己像を達成し、自分が大切だと思っている人々を喜ばせたいという気持ちは、いつからどのようにして発達していくのでしょうか？ これには、まず、親をはじめとして自分が大切だと思う人々との、密接な愛着の感情の発達が基盤になっていると考えられます。また、自意識、自己というものの認識も大切でしょう。これらの発達とともに、あるべき自己像が形成されていくのでしょうか、これらが、どのようにして道徳感情となっていくのか、私は詳しいことを知りません。いずれにせよ、道徳的行動の発達を知るためには、このような事柄がどのようにして発達していくのかを知ることが大切だと思います。

\*本文は、出典の記述を一部省略している。

(出典 長谷川眞理子『生き物をめぐる4つの「なぜ」』より)

問一 傍線部(ア)～(ウ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は(ア)

(イ) 17、(ウ) 18

(ア) ブンケン

- ① 参加人数がケンネン材料だ。
- ② 彼はケンヤク家だ。
- ③ 理科のジツケンを実施する。
- ④ 給食のコンダテを考える。
- ⑤ 朝刊のシメンを飾る。

(イ) タンチ

- ① 地方の窯元をタンボウする。
- ② バンタンを整えてお待ちしております。
- ③ 彼女と仕事をブantanする。
- ④ 知人の訃報にふれ、ヒタンにくれる。
- ⑤ 彼の作品はコタンの境地に達している。

(ウ) ホウシヨウ

- ① 他人の行動にカンシヨウする。
- ② それは大層、シュシヨウな心掛けだ。
- ③ 甲社のパソコンをスイシヨウする。
- ④ 核廃絶をテイシヨウする。
- ⑤ 彼の努力が勝利をシヨウライした。

16、



問二 本文中の（ a ）、（ b ）に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は（ a ）  、（ b ）

- ① にもかかわらず
- ② さもないと
- ③ なぜなら
- ④ あるいは
- ⑤ したがって

問三 空欄

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

- ① 人の心の仕組みが世間一般に承認されているとはいえないので
- ② 他人の心というものは手にとって見てみることはできないので
- ③ 科学的な研究によって実証されたものではないので
- ④ 私は児童心理学や発達心理学の分野は詳しくないので
- ⑤ 私たちは日常的に他者の心の状態を無意識に類推しているので

問四 空欄

Y

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

22

- ① 自分が成長できなかったという後悔の感情
- ② 自分の要求を満たしてしまったという後悔の感情
- ③ 親や他のおとなから称賛を得られなかったことの失望
- ④ 他者を傷つけたことに対する後悔の感情
- ⑤ 心の葛藤に負けてしまったことの失望

問五 次の一文は、本文中の《1》～《5》のどこに入れるのが適当か。次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

23

これが「共感」というものでしょう。

① 《1》

② 《2》

③ 《3》

④ 《4》

⑤ 《5》

問六 傍線部A「二つの対立する「快」の感情のうち、一方を抑制して」とあるが、抑制するものの具体的な説明として最も適当な

ものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 24

- ① 他人から称賛されることの「快」。
- ② あるべき自己像を達成することの「快」。
- ③ 自己抑制を達成することの「快」。
- ④ 他者の欲求を満たすことの「快」。
- ⑤ 自己の欲求を満たすことの「快」。

問七 傍線部B「前頭葉から辺縁系に向けての神経ニューロンの発達」によってできるようになることの説明として最も適当なもの

を、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 25

- ① 他者にも心があり、欲求があるということを理解すること。
- ② 自己の欲求を抑制すること。
- ③ 他者視線や表情から他者の思っていることを類推すること。
- ④ 他者の立場になったときのことを想像すること。
- ⑤ 自分があるべき自己像を達成すること。

問八 傍線部C「自分があるべき自己像を達成し、自分が大切だと思っている人々を喜ばせたい」とあるが、これが達成できなかつたときの感情を本文では何と説明しているか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 26

- ① 恥
- ② 罪の意識
- ③ 絶望
- ④ 葛藤
- ⑤ 道徳

問九 本文   の中のa～dの文を意味の通るように並べたものとして、最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 27

- ① b—d—a—c
- ② b—c—a—d
- ③ c—b—d—a
- ④ c—a—b—d
- ⑤ b—d—c—a

問十 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 28

- ① 子どもに道徳的行動を教えるためには、かつてのように、していいことは何か、いけないことは何かということを、条件付けのようにして大人が罰を与えるのではなく、子どもの心が称賛を欲するような社会性を身につけさせることが大切である。
- ② 道徳的行動が選択されるためには、「罪の意識」と「恥」というネガティブな感情が重要な役割を果たしているが、これらがどのように発達していくのかを知ることが道徳的行動の発達を知るためには大切になる。
- ③ 「心の理論」がうまく働いて、人が自分とは異なる他人の状態を推測し、その人が何を欲しているのかを理解することができるようになりさえすれば、他人からの称賛を得ることができるようになる。
- ④ 「心の理論」とは、人間の心というものが、人間の誕生した後、どのように社会的参照をしながら発達していくのかという、心についての科学的な理論のことをいう。
- ⑤ 他者理解は、自分を参照にして行うので、他者の状態を理解するには、自分が同じような状態にあったときのことを思い起こすが、これは一歳未満の赤ん坊にも見られることである。

## 国語A【解答】

受験校	受験番号	フリガナ	
		氏名	

/100
------

### 第1問

	問1				
	1	2	3	4	5
解答	④	①	③	④	④

	問2			問3	
	6	7	8	9	10
解答	⑤	①	②	②	⑤

	問4	問5	問6	問7	問8
	11	12	13	14	15
解答	⑤	③	⑤	③	④

### 第2問

	問1			問2	
	16	17	18	19	20
解答	④	①	③	③	⑤

	問3	問4	問5
	21	22	23
解答	②	④	④

	問6	問7	問8
	24	25	26
解答	⑤	②	①

	問9	問10
	27	28
解答	③	②